

霞ヶ浦高等学校附属中学校

平成三十年 第一回 一般入学試験問題

(平成二十九年十二月十七日実施)

国語

試験時間 四十五分

注意

- 一 この問題用紙は、「はじめ」の合図があるまで開いてはいけません。
- 二 「はじめ」の合図があったら、最初に受験番号と氏名を、解答用紙に書きなさい。
- 三 問題を読むときは、声を出してはいけません。
- 四 答えは、すべて解答用紙に書きなさい。
- 五 記号による解答は、特別の指示があるもののほかは、あてはまるものを一つ選び、その記号を答えなさい。
- 六 記号以外の解答は、指示のとおりになさい。
- 七 字数制限のある問題では、句読点やかぎかっこなどの符号もすべて字数にふくめます。試験中に携帯電話などの使用はできません。

# 1

次の文中の——線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書きなさい。

- ① 易しい問題。
- ② 絹のくつ下。
- ③ 国歌を独唱する。
- ④ 厳格な父のもとで育つ。
- ⑤ カガミを見る。
- ⑥ 一列にナラぶ。
- ⑦ グンシユウの中で迷子になる。
- ⑧ 結果をホウコクする。

## 2

次の各問いに答えなさい。

問一 次の(1)～(3)の各組の言葉が類義語の関係になるように、□にあてはまる漢字一字を書きなさい。

- (1) 形見Ⅱ□品
- (2) 永遠Ⅱ永□
- (3) 用意Ⅱ□備

問二 次の(1)～(3)は慣用句で、□には体の一部を表す漢字が入り、( )

内はその意味を示しています。□にあてはまる最も適当なものを、あとからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- (1) □を焼く (うまく処理できずに困る。)
  - (2) □にかける (自慢する。)
  - (3) □を冷やす (落ち着きをとりもどす。)
- ア 足    イ 頭    ウ 胸    エ 手    オ 鼻

問三 次の(1)～(3)はことわざで、( )内はその意味を示しています。

□にあてはまる最も適当な言葉を、それぞれひらがな二字で答えなさい。

- (1) 下手の□好き  
(下手なくせに、その物事が好きで熱心であること。)
- (2) □は友を呼ぶ  
(気の合った者や似通った者は自然に寄り集まる。)
- (3) □の下の力持ち  
(人に知られないで、かげで苦勞すること。また、その人。)

問四 次の(1)～(3)の文の□にあてはまる最も適当な言葉を、( )

- (1) 内の字数で答えなさい。  
たぶん断られる□。(ひらがな三字)
- (2) どうか話を聞いて□。(ひらがな四字)
- (3) たとえ失敗し□、後悔してはいけない。(ひらがな二字)

次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

便利はぼくたち自身の能力を低下させたり、心やからだの健康に害を与えたり、生きる楽しさをとりあげたりすることもある。 A、車の

せいでぼくたちの歩く能力は衰え、肥満などの健康上の問題が増え、散歩の楽しさが減る、というふうに。

「楽」という漢字には、大きくいって、ふたつの意味がある。ひとつは、「楽しいとか快樂とかの「楽」」。もうひとつは便利とか簡単を意味する「楽」。「楽しいこと」と「楽なこと」<sup>①</sup>。このふたつを混同し、まるで同じことを意味しているかのように思いこむのは危険なことだ。少し考えればわかるように、楽なことが楽しいとは限らない。便利で楽なことがかえってぼくたちの楽しさをうばってしまうこともある。

そして、楽しいことが、難しかったり、複雑だったり、面倒だったり、時間がかかったりすることはよくある。そればかりか、難しく、複雑で、面倒で、時間がかかるからこそ、楽しい、ということも珍しくない。

だから、ぼくたちはやっぱり、「楽しいこと」を「楽なこと」から区別しておいたほうがいい。<sup>\*</sup>ファストな「楽」を手に入れるために、<sup>\*</sup>スローな楽しさや気持ちよさを犠牲にしないようにしましょう。そう考えるのがアウトドアという遊びだ。それは、楽で便利なことのかわりに不便で時間のかかるスローな楽しさをぼくたちに与えてくれる。

アニメ映画の宮崎駿監督が言っていたことを思い出す。元気がない今の幼い子どもたちに元気を出してもらうためには、<sup>②</sup>まず保育園や幼稚園の庭をデコボコにするのがいい、と。実際にそうした保育園があつて子どもが確かに生き生きと元気にかけ回っているという。ところで、ど

うやらこれは幼い子どもばかりの問題ではなさそうだ。つまり、ぼくたちが生きる人工の世界は、どこもかしこもまっ平らで、ぼくたちはみんな、デコボコという楽しさをとりあげられてしまったのではないだろうか。

デコボコはたしかに不便だし、効率的ではない。便利さと効率性ばかりを追い求める経済中心の社会は、デコボコが好きではない。でもデコボコこそ自然界の特徴だといえる。日本は、二十五倍もの広さをもつアメリカよりも多くのコンクリートを使って、世界一のペースで自然のデコボコを人工的で平らな平面に変えてきた国だ。単に一部の人の経済的な利益のためというだけでは説明できない「反デコボコ」や「反自然」の力が社会全体に強く働いていたとしかぼくには思えない。もちろん、<sup>③</sup>それは一方で経済成長の原動力となったわけだが、もう一方では、いたるところで自然環境と地域の文化を破壊して、楽しくない世の中をつくることにもなった。

そんな世の中であつて、アウトドアの遊びをとおして、ぼくたちは自然のデコボコを——そして、デコボコの世界だけがもつ楽しさを——近代的な暮らしの中に呼び戻そうとしているのではないだろうか。アウトドアを楽しむときの大人たちは、「ままごと」をしている幼い子どもたちにそっくりだ。たき火を囲んでは、まるで、自分たちも知らない遠い昔の人々の暮らしをなつかしむかのようにもある。またそれはすっかりよそよそしくなってしまった自然界との仲なおりのための儀式。人間の世界だけではなく、自然界を含めた広い世界の一員としての自分の場所を再発見しようとしているようでもある。

アウトドアという遊びに参加するきみは、<sup>④</sup>日常生活の中に流れる

時間とはずいぶんちがう時間の中に入りこむ。食事のしたくをするときの時間、たき火を囲む時間、釣り糸の先の浮きを見つめる時間、カヤックで水をすべる時間、山の尾根道を歩く時間、テントの中の時間、星空をおおぎ見る時間。一見、静かで地味なそれらの時間のそれぞれがきみの「魂」を揺さぶる。

〔B〕、アウトドアは屋外にだけとどまるものではない。きみはあのアウトドアのデコボコの世界の断片や、楽しく美しく安らかな時間の余韻を、屋外から自分の家へともち帰るだろう。そしてそれらは、日常の中にまぎれこむ。あのデコボコな空間やスローな時間が流れ込んだきみの毎日の生活はもう、以前とは同じものではない。忙しさやあわただしさの中に戻っても、きみはもう以前とはちがうきみ。きみはたしかに前より生き生きと輝いているだろう。

(辻信一「『ゆっくり』でいいんだよ」より)

\*ファストな||早い。

\*スローな||おそい。

\*アウトドア||屋外。野外。

\*カヤック||軽量の小船。

問一 〔A〕、〔B〕にあてはまることばの組み合わせとして最も適当

なものを、次から選び、記号で答えなさい。

- ア A しかし B さて  
イ A また B つまり  
ウ A たとえば B しかも  
エ A だから B よって

問二 ——線①「もうひとつ」の意味で使われている「楽」をふくむ言

葉を、次から選び、記号で答えなさい。

- ア 苦楽 イ 楽勝 ウ 行楽 エ 快樂

問三 ——線②「保育園や幼稚園の庭をデコボコにする」とありますが、

これによって園児たちは何から解放されるのですか。文章中から五字でぬき出して書きなさい。

問四 ——線③「それ」とありますが、「それ」とはデコボコをどうす

ることですか。二十字以内で書きなさい。

問五 ——線④「日常の生活の中に流れる時間」とありますが、これは

何に満ちあふれた時間ですか。文章中から十字でぬき出して書きなさい。

問六 本文の内容と合っているものを、次から選び、記号で答えなさい。

ア まっ平らなコンクリートにおおわれた世界をデコボコにするこ  
とによって、昔の環境を取りもどす必要がある。

イ 効率性ばかり求める経済中心の社会にアウトドアの遊びを取り  
入れることで、楽しく便利な社会を築くことができる。

ウ 経済中心の社会が行きづまったことで、自然界のデコボコのす  
ばらしさを人々が見直しつつある。

エ アウトドアの遊びは、近代的な暮らしの中では見いだせない楽  
しく美しく安らかな時間をもたらしてくれる。

次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

小学六年生の幸子は、家の庭木を剪定する田坂さんの仕事ぶりを眺めている。

職人がハサミをベルトにしまい、シダレモミジの枝をあちこち揺さぶり始めた。切られた枝や葉が落ちる。全体を眺め渡した。

幸子は窓を開けた。

田坂さんは脚立ごとゆっくりと回りながら、最後の仕上げのハサミを入れ始めた。いくつかの小さなパチンがあった。結局、三周して剪定を終えた。さっきまではまったく見えなかったシダレモミジの枝振りが残された。太い幹から小枝の先まで、いくつにも枝を分けてゆく姿に、そういう木の形だったんだねと初めて知った。田坂さんはなお眺めている。10  
そのとき幸子は不思議な感覚に包まれた。今までにないほど強く、はつきり来ると予感できた。

向こうのススキがかすかに揺れる…

遠きものは静かに、静かにやって来た。

風はモミジのいくつにも細く裂けた葉に、ゆっくりと触れながら流れてゆく。枝に残されたすべての葉の先端は、風を送るようにそよいでいる。木の姿全体が風になっている。気がつくとき、シダレモミジの腹の中に清流が見えた。上から眺めていると、たしかに透明なものがそっと過ぎてゆく。①ため息が出た。

あの職人さんは風を呼ぶ風使ではないのか。

次はハクモクレンらしい。うちで一番高い木だ。

田坂さんは長い竿のようなものをハクモクレンに立て掛けてから、さ

っきのとは違う三メートルくらいある長い脚立を登り始めた。動作が速い！

登った中ほどで、脚立に付けられた縄でハクモクレンと脚立を縛って固定した。さらに登り、また、ハクモクレンと脚立を縛った。あっ、脚立の天辺に立った。すごい、サーカスだ！ \*出初め式のハシゴ乗りみただ。動作はさらに速い、腰に巻いてあった縄を瞬間にしてほとき、自分の胴を木に縛って固定させた。さっきの竿のようなものを取った。それを突き上げる。何をするんだらう？ 空に突き出ている一つの枝を竿で捕らえた。両腕がぐいっとしなったそのとき、竿の先で捕らえられていたハクモクレンの一番上の枝がヒュッと宙を飛んだ。

「うわ！」

幸子は思わず声を出した。

うすい空の色の中を枝が飛んだ。幸子の視線は大きく弧を描いて地に落ちる枝にくぎづけになった。

次々に枝は飛んだ。狙いどおりに飛ばされているようだった。田坂さんの位置は大きなハクモクレンの真ん中からちよつと上だ。下から五メートルくらいの木を中心にいて、四方の枝の全てに竿の先端のハサミをどどかせている。

ヒュッと何度も空に飛ぶ枝。ハクモクレンから枝が花火のように散ってゆく。

幸子は窓枠にかぶりついて見ていた。

竿のようなものは竹みたいだ。先が傘の柄のような形をしている。それを木に引っ掛けて、手元のヒモを引くと枝が切れる。

幸子は、ほんの数分にして剪定の終わった、家で一番大きいハクモク

レンを見た。高い所の余分な枝と枯葉を落として、いつもより小ぢんまりと佇んでいる。だと幸子は、木の中から来年の春に花を咲かせる目に見えない力を感じた。銀色の毛をまとった冬芽が、今にもうわっと枝先から出てきそうだ。それらの強さが青い空さえ呼んでいる。

50

幸子は思わず手をたたいていた。すごい、すごい、すごい。

田坂さんと目が合った。笑っている。幸子も笑った。気がつくとお母

さんも庭に出て笑いながら拍手をしている。すごい、すごい、すごい。

歌舞伎の宙乗りよりすごい。

幸子の胸は空を飛んだ枝でサイコーに爽快になった。

55

(本多明「幸子の庭」より)

\*剪定Ⅱ庭木の形を整えるため、枝の一部を切り取ること。

\*脚立Ⅱ二つのハシゴを両側から合わせ、上に板をのせた形のふみ台。

\*出初め式Ⅱ消防関係の仕事初めの式。

\*ハシゴ乗りⅡまっすぐに立てたはしごの上で曲芸をすること。

\*弧を描くⅡ丸い曲線の形になること。虹のようにアーチ状になっている様子。

\*宙乗りⅡ針金などを利用して身体を宙へつり上げるしかけや演技。

問一 文章中に、幸子が夢中になって田坂さんの様子を眺めている様子を

表している一文があります。その一文のはじめの五字をぬき出して

書きなさい。

問二 ———線①「ため息が出た」とありますが、このときの幸子の気持ち

ちとして最も適当なものを、次から選び、記号で答えなさい。

ア 剪定によってさっぱりとした木に強風がふいたため、どうなるかと心配したが、無事だったのでほっとしている。

イ 剪定によってシダレレモミジの木が今までと全く異なる姿になったことに、おどろきとまどっている。

ウ 剪定によって木がこんなに美しいものであったことを知り、今まで見ることができなかったことを残念に思っている。

エ 剪定によって本来の木の姿を取りもどした木の全体を、風が葉にふれながら通りぬける様子に感動している。

問三 ———線②「長い竿のようなもの」とありますが、その使い方を次のように説明しました。

A、B にあてはまることを文章の中からAは八字、Bは六字でぬき出して書きなさい。

A と、 B が動いて枝を切ることができる。

問四 ———線③「大きく弧を描いて地に落ちる枝」とありますが、この

ような落ちる枝の様子を何かにたとえたことばがあります。その言葉を文章から探し、二字でぬき出して書きなさい。

問五 ———線④「目に見えない力を感じた」とありますが、幸子は何が

どうすることを予感しているのですか。十五字以内で書きなさい。

問六 この文章は、どのようなことが中心として書かれていますか。最も

も適当なものを、次から選び、記号で答えなさい。

ア 周りの反応を気にしながらも集中して仕事を行う誠実な田坂さんの仕事ぶり、田坂さんのめずらしい動きが気になってしかたがない幸子の姿。

イ まるでサーカスの曲芸師のような動きで木に不思議な効果をもたらえる田坂さんの剪定のわざと、田坂さんの仕事ぶりにあこがれをいだく幸子の姿。

ウ きびきびとした動きで作業を行う田坂さんの仕事ぶり、田坂さんの作業とそれによって木が変化する様子に見入っている幸子の姿。

エ 田坂さんの剪定によって別の木になったと見まちがうほどに変化した木々の様子を見て、落ちこんでいた気持ちから元氣を取りもどした幸子の姿。